

れなかつた。

たしかに労働生産性は向上したが、農家の農業所得は上らなかつた。その過程で農民は農業を「仕事 Work」とみず、「労働 Labour」と見る労働觀を身につけた。「労働」は時間で計られねばならず、労働時間は正当な報酬であるがなわれねばならない。

選択的拡大・基盤整備・機械導入といった商品生産のための投資は、農業經營内部での消耗が不可能になると、農外所得で補わねばならぬ。総兼業化の過程で、農外就労の経験は、さらに賃労働の考え方を強固に身につけさせた。

このような状況の中で、農作業を「労働」と考えず、いままお「仕事」と考へて、旧来の複合經營を守り、その不足する労力を、部落の伝統的なユイ（手間がえ）により補充し、破壊されぬ農業經營を行つてゐるものがある。本論はこれらの事例から、二つの事例を選び、農家生活の破壊を阻む伝統的労働觀および部落の機能の、現代的意味をさぐろうとするものである。

農家の生活破壊は、農民が近代的な、いわゆる資本主義的經營を志し、その經營感覺を身につけたときにはじまる。

わが国の構造政策は、一見、農業經營の近代化を可能にし、農家の所得の向上を志向するに思われた。しかし周知のように、技術革新の寄与率が、工業に比べ相対的に低い農業においては、規模拡大以外に工業の所得に追いつくことは不可能である。にもかかわらず、省力化による低コスト商品生産以外に、農民はとるべき道を与える

3 ユイと生産者組織

山口大学 山 本 陽 三

資から救われ・ネオ、マスカットの経営を順調にのばしている。

これらの事例から、たんにそれを農業経営の視点からのみではなく、「労働觀」という価値意識の面からも接近し、一つの近代化批判を行うのが、本論の目的である。